

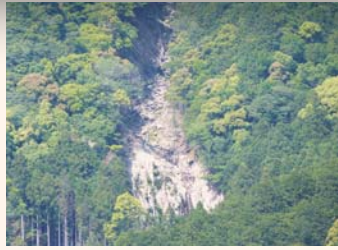
熊野の
森林から

怪野の熊

「大蛇」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



平成23年の紀伊半島大水害では、新しい滝がで
きるなど土砂災害で一夜にして地形が大きく変
わった場所があった。まるで大蛇が暴れ回ったか
のようだ。災害をイメージさせる大蛇伝承は各地
に残るが、紀伊半島には特に多い。

熊野の山中には、たくさんの大蛇伝承が残って
いる。有名な「安珍清姫」の話では、安珍に逃げられた中
辺路の真砂のお姫様、清姫が悲しみのあまりに大蛇
に変化し、最後には道成寺にて安珍を焼き殺してし
まう。大蛇伝承
は、川、滝、沼など
水辺での男女の
悲恋話か、不思議
な美女が現れそ
の正体を探った
ところ実は大蛇
だったという内
容が多い。中辺路

町の内井川にあ
る夫婦滝、温川
(ぬるみがわ)の
十国(じっごく)
谷、日置川の安
宅(あたぎ)、北
山村の久保の小
女郎の話などに
みられる。新宮
の浮島の森に伝わるおいの伝承もその一つだ。本宮
の平治川の滝の主は美しい男の大蛇だったという。
龍神村の底主人(そこうず)、大塔村の合川(ごうが
わ)のモリトウさんは正体不明の大きな動く何か
だったようだ。古座の鯛島と河内島(こうちじま)に
は、魚の鯛と大蛇の少し寂しい恋話が伝わる。
和歌山県ではないが、奈良県の十津川には大蛇伝
承が驚くほど多い。男女の話だけでなく、鬼女の話、
祟(たたり)の話など内容はさまざまだが、集落ごと
に大蛇が出没した印象を持つほどに多い。なぜ、これ
ほどにまで大蛇の話が多いのか、一つの仮説を考え
ている。それは、災害との関係だ。平成23年の紀伊半
島大水害の苦く悲しい記憶は未だ癒えないが、多数
の深層崩壊、土砂崩れ、土石流が人々の暮らしを襲っ



古座の鯛島は、隣の九龍島(くるじま)とともにテ
レビの無人島体験の第一話の舞台として知られ
るようになったが、恋しい大蛇と離ればなれに
なった鯛が石になってできた島だ。ちゃんとして
目玉がある。古座川を上った大蛇の方は、鯛を思っ
て河内島(こうちじま)になった。

た。一晩で忽然(こつぜん)と現れた滝や扇状地を前
に、地形というのは災害など突発的な時に大きく変
化するということを学んだ人は多いだろう。全国を
みると、災害は大蛇が暴れたせいだという伝承は多
く、神話の八岐大蛇の話などはその代表だ。紀伊半島
大水害でも十津川は大ダメージを受けたが、この地
に大蛇伝承が多く残っていることと災害の話は無関
係ではないだろう。

ところで、一般的には女の執念深さだと語られる
「安珍清姫」は『今昔物語集』の中に原話が見られる
が、最後には法華経の力で苦しみから救われるとい
う内容、つまり宣教となっている。一方、地元では、清
姫は蛇になんかは変化せず、悲観して入水したと伝
わる。昔は、とかく男を過剰に美化しがちなので、実
は地元の話の方が本音だったのではないかと思う。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大
学大学院生物資源研究科博士後
期課程を修了。平成8年から和歌
山大学システム工学部講師、12年
から助教授、19年から教授、51歳。
専門は森林生態、自然再生、砂漠
緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネ
ルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊
野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

